



## 2019年教育のつどいin滋賀

### 愛教労より14名参加 ～現場での事例から学ぶ～

8月16日～18日に滋賀で、教育のつどい・全国教研が開催されました。シンポジウムや教育フォーラムもあり、教職員だけでなく、保護者や地域の方たちとともに、学校や教育の現状と今後の課題について考え合うことができました。愛知からの参加者やレポート報告者の方たちから寄せられた感想の一部を紹介します。



#### 「全体会シンポジウムに参加して」

学校に、福祉の視点を！というお話でした。髪を染めても、コーラを飲みながらも、怒られることが分かっているけど何で彼らは学校に来るのか、その子の行動の意味を考えることが必要。のんびりしていいよ、失敗していいんだよ、自分で決めていいんだよ、学校で子ども権利条約を最大限に生かしていくこと、そのために、大人が忍耐力と想像力を働かせようと話された。

「何甘やかしているの！」「何できつく叱らないの？」とずっと、言われてきた。現実の子どもと向き合うとしんどくなる、叱って言うことを聞かせて終わりではない、しんどい、クラスをうまくまとめられず、私は病んでしまった。教師を辞めたいとは思わなかったけれど、こんな私が教師をやっているのか、ずーと悩んでいた。

失敗してもいいよ、自分で決めていいよは、子どもだけでなく教師も同じ。シンポジウムを聞きながら、悩みながら教師をやった自分をおしく思えた。今なら頑張ったねと言える。

ステージに掲げてある「教え子を再び戦場に送るな」は、もう過去のことと思っていたけれど、今は、現実私を励ます言葉になっている。ひとり一人に寄り添って、みんながしあわせになるために、教育はあるのだと思った。(Y・T)

#### 「平和と国際連帯の教育の分科会に参加して」

平和教育といえば歴史教育、教科は社会科、という「相場」を打ち破っていくことが必要だと感じた。平和教育はもっと未来への希望を語る場であっていい、必要に応じて歴史にもきちんと目を向けていく、そういう平和教育のあり方を模索していきたいという思いを強く持った。

「インスタ映えのする平和教育」を実践し、いずれあの場で発表したい。(K・T)

#### 「障害児教育の分科会に参加して」

はじめに、奈良教育大の越野先生から基調報告がありました。障害児学校や、障害児学級に在籍する児童生徒は各地年々増加しているのに、それに見合った教育諸条件整備が行われていないという指摘がありました。しかし、その苦しい中であっても、子どもを中心に置いたたくさんのレポートが出されており、2日間で大いに学ぶという討論の呼びかけがありました。

その後、いくつかの分散会に分かれて議論されました。私の出席した分科会は小学校の知的障害児学級のレポートが中心で、2日間に8本のレポートが報告されました。

特に印象に残っているのは、ケンカばかりしていた子どもたちと温かく粘り強く関わる中で、初めて1時間ケンカをせずに一緒に遊べるようになった時の喜びや、学年や発達段階の違いをこえて一緒に学べる単位についての報告です。

その中で、「1対1で勉強を教えても分かるようにはなるんだけど、なんか面白くない」という言葉が取り上げられました。他のレポート発表とも絡めながら、子どもの願いや発達要求を大切にしながら、

小さくても集団としての学級をどう作っていくか、教育課程をどう作っていくかみなさんとたくさん考えることができました。

私のレポートも友達との関わりの中で成長する子どもの姿を書いたものでした。他のレポートのテーマとも共通している部分があり、発表の緊張はありましたが、子ども感を深めることができた貴重な経験になりました。(N・K)

#### 「生活指導・自治活動の分科会に参加して」

初めて参加、初めての分科会発表でいささか緊張をしました。自分の実践について、どのように批評されるのか不安もありましたが、たとえ辛辣な批判があったとしても、学びに繋がると思い肚を据えました。

『学級活動で「遊び」と「おしゃべり」を楽しもう！』と題し報告をしました。教育現場の多忙な状況の中、「学級活動」の時間は削られ、時間調整に浪費されている現状があります。しかし学級活動は、学級の子ども達同士を繋げ、人間関係や民主主義を学ぶ上で、最も重要な時間だと考えます。

その方法として、様々な「遊び」的活動と、「おしゃべり」的活動を紹介しました。

発表後の質疑応答、意見交換の時間では、構えていた自分が拍子抜けするほど、温かく好意的な意見をいただきました。自分の発表が良かったのではなく、どのレポートに対しても、参加者の皆様の心配りがありました。その上で貴重な意見をいただき、自分一人では一面的にしか考えられなかったことを多面的に教えていただきました。

次期学習指導要領で、「主体的・対話的で深い学び」が打ち出されていますが、深い学びとは、授業だけで成立するものではないこと。子どもの主体性は、日常生活での小さな自己決定の積み重ねと、自治的な活動の中で育まれること。「おしゃべり」では学級内の諸問題の解決だけでなく、「幸せとは」「友達とは」「なぜ人は人をいじめ始めるのか」など本質的な問いを投げかけること。答えが一つではない課題について、対話しながら様々な価値観を共有すること。「遊び」や「おしゃべり」に参加しづらい児童に対し、強制するのではなく容認すること。自分の学級だけでなく、学年の取り組みに広げていくこと。多くのことを教えていただきました。

学級をまとめるために「遊び」「おしゃべり」の方法を使うのではない。学級の一人一人が他者と自己の理解を深め、幸せになるために、何ができるか考え実践すること。見た目や方法論に囚われず、子どもの成長を願い、投げかけ、待つことが大切だと学びました。

「遊び」「おしゃべり」といった自身の「教材観」について実践発表に臨んだ教育のつどい。しかし自身の「子ども観」、「教育観」、「人生観」が揺さぶられ、深まった気がしています。教育に対し、深く真剣に取り組んでいる全国の道友と交流し、視野が広がったこと。大変貴重な経験をさせていただきました。この経験を学校現場で還元していきたいと胸を熱くしています。ありがとうございました。(K・A)

## 「発達・評価・学力問題の分科会に参加して」

毎年、全国教研の分科会で強く感じることは、教育の現状を切り拓く実践の幅の広さや視野の広さと、それを貫く明確な柱の存在です。これは、他の全国大会では味わえないものです。「発達・評価・学力問題」の分科会の良いところは、レポートの数がそれほど多くないこともあって、一つ一つの実践に対する分析と共感が豊かになされており、質の高い議論になっていることです。レポーターとしても、たっぷりと実践を語るができます。

今年は、新学習指導要領の学力観の強調やそれに伴う学校現場への競争的圧力と機械的形式的「指導」の広がりの中で、①「子どもの発達に寄り添う学力形成」という観点で、子どものつまずきやトラブルを子どもが育つ大切なチャンスとして、何より子どもの生活から生じるニーズに応じる、そうした教育実践の豊かさを議論し合うこと、②「学力形成と学級づくり」という観点で、多様な生活背景と個性的な興味・関心が、豊かな教材を介して学級で交流されるような「対話溢れる学び」の可能性を考え合うことの二つが提案・議論の柱でした。

日常的な国語指導の積み重ねが、狂言・落語という伝統芸能に向けての取り組みの中で大きく花開いた高知の報告、複式学級という困難な状況を子どもたちと共にプラスに変え、独自の学びを創り出した京都の報告、小学校での学級崩壊を引きずった子どもたちを豊かな自主活動の中で成長させていった埼玉の報告、定年を前に学力についての自分史も合わせながら、小規模中学校で着実に積み上げた学力づくりの取り組みを語られた広島報告、小学校1年生の身体「異変」とも言える状況を前に、そこから身体づくりとクラス

づくりをしなやかに取り組んだ兵庫の報告、様々な子どもたちとの基礎学力づくりの取り組みを振り返り、集団で学力回復に取り組む活動の重要性を改めて問い返した大阪の報告、どれも聞きごたえのある内容で、活発な議論が交わされました。私も『攻撃』する子どもたち、『守り』のない子どもたちをテーマに、この10年程の子どもたちとその関係性づくり、クラスづくりについて報告しました。沢山のご質問・ご意見をいただき、充実した学びができました。提案の機会をいただき感謝です。

討論の中では、子どもたちの時代的変化とはどういうものか（心の振れ幅の大きさ、行動の表裏、条件付き愛情等子ども観が狭く高くなっていること等）が明確にされ、子どもたちの状況・関係性といった子ども研究と教材研究の深さ等日々の実践の小さな積み重ねの素晴らしさについて触れた意見が数多く出されました。また、学校が担うべき「学力の基礎・土台」を子どもの発達状況、変化に応じて変えていくことの大切さ、実践の自由度の重要性についても改めて確認されました。最後に、「実践をいかに継承していくか」ということについて、ベテラン教師たちに意見が求められ、それぞれの思いを語る中で、困難に立ち向かう粘り強さこそが子どもと教育を変えるという認識が共有されました。来年度に向けては、小学校の低中学年の「基礎学力づくり」は、それにふさわしいものが確実に積み重ねられているが、プレ思春期後の子どもたちにとっての学力づくりはどうあるべきか、教科的な奥深さ、広がりや知識を有機的につなげる学力づくりについてさらに多くの実践報告が求められるという点が課題として確認されました。(Y・S)

## 2019年 夏の教育委員会キャラバン

### 特別支援教育課・財務施設課・教育企画課・教職員課法務グループ・人事グループ ～現場の実態を伝え懇談～

#### 特別支援学級や通級指導教室担当教員から

特別な支援の場を必要としている児童生徒は、年々著しく増加しています。しかし、それに見合う環境や担当者の配置・働き方とはなっていません。障害児教育部は、県教委に担当者の切実な声を伝えるとともに、率直な話し合いをしました。

<通級指導教室について>

- ・ 担当児童を30人以上受け持っている人もいる
- ・ 空き時間が無い
- ・ 給食の時間や休憩時間が準備や移動の時間になる
- ・ 巡回先の教室は、エアコンが無いなど学習環境が悪い

話し合いの中で、通級児童生徒数は自校通級が6割強、巡回は3割強ということが分かりました。巡回先の児童生徒数が少ないということは、希望者が入級できないことが多いのではないかと疑問が生まれました。教室環境については、設置校では学校訪問で把握しているとのことでした。比較的環境の整っている設置校だけでなく、巡回先の教室環境も把握するよう求めました。

<中学校の特別支援学級>

- ・ 担任以外に配置(2学級から担任+1名、4学級から+2名)された教員に、給食や放課の時間も入ってほしい

中学校は教科担任制を採っている関係で、担任より多くの教員が配置されているということが分かりました。しかし、配置された教員が特別支援学級の担当として働いているかは、県としてきちんと把握している様子ではありませんでした。担任以外の加配教員も、ただ授業を担当するだけでなく、放課・給食・清掃・行事等、学級指導全般に関わるよう今後も求めていきたいです。

#### 多忙化解消が進まない現状について

多忙化解消プランも3年目となりましたが、目標として掲げた「80時間超 0%」には程遠い現状です。「調査依頼も最小限に減らしており、これ以上何をすればいいかわからない」と嘆く担当の教育

企画課と率直な話し合いを持ち、これからの方向をさぐりました。

- ①作品募集など、「学校の仕事ではない」本来業務以外のものがまだまだあり、整理されていない。
- ②在校時間調査結果を各学校に知らせ、どのように業務改善が他校でされているかを知る機会にする。
- ③在校時間記録に過少申告が多数あり、休憩時間が計算されていないなど法令違反が続々。
- ④労安の知識がない管理職が多い、あっても本気で取り組んでいないので、管理職の評価の項目に労働時間のマネジメントを入れてはどうか。
- ⑤県のプラン終了後は、各自治体、各学校独自の「多忙化解消プラン」を作り、実践する段階になってくる。
- ⑥当面、次のフォローアップ会議に向けて、意見を交換する場をこれからも持っていく。などを、意見交換しました。

#### 不妊治療をしている教職員数は？

女性部として法務グループと懇談しました。見出しの問いに法務グループは、微妙な問題で調査はしにくいと回答。休暇の扱いについては、病気による不妊ならば、療養休暇が適用できると問い合わせに答え、原因不明の不妊は年休になっていると回答しました。また、安心して治療を行うためには、男女ともに特別休暇に入れて柔軟に休めるようにすることが大切ではの問いに、愛知は国と同一歩調をとっている。29年度の国の人事院勧告で不妊治療の件に触れたので、愛知県人事委員会も追随すると思ったがしなかった。今年の国の勧告から不妊治療はなくなっていた。

#### 病気で療養休暇

病気で療養休暇を使えることを知らずに「年休を使うのがもったいない」と言っているのはよくある話。自分も現場にいるときに知らなかった。新任の事務職員の研修では、きちんと伝えている。と前向きな取り組みもありました。一歩前進です。